

帝都地下迷宮

中山七里

第七回

第四章 汽車をたよりに思い立つ

1

予想されていたことだが、警察の事情聴取は公安部だけに留まらず、わずかに遅れて刑事部の捜査員も小日向こひなたの職場にやってきた。

「まるでウチに強制捜査が入ったような物々しさだな」

山形は半ばなか怒り、半ばあき呆れていた。

「ただ事件に巻き込まれただけという話は、いったいどこまで信用したらいいのかね」

山形が懐疑的になるのも無理のない話だった。何しろ一日のうち
にふた組も刑事が出入りを繰り返し返しているのだから普通ではない。

物々しさというのも決して誇張こちやうではない。フロアに見慣れない二人組が代わる代わる現れては職員しんごうの一人を別室に連れていくのだ。

これで雰囲気がおかしくならないはずがない。

「警視庁刑事部捜査一課の春日井かすがいです。横にいるのは香田こうたといいま
す」

小日向はまたもや応接室に連れ込まれた。シチュエーションは先
刻と同様、違いがあるとすれば刑事の顔ぶれくらいのものだ。

それにしてもと思う。柳瀬やなせと栞矢くぬぎやの公安コンビは二人とも猛禽類もうきんるい
のように油断ならなかったが、刑事部のコンビは平凡なサラリーマ
ンにしか見えない。腕貫うでぬきさえすればこのフロアで働いても全く違和
感がない。同じ警視庁の刑事でも、公安部と刑事部ではこれほど違
うものなのだろうか。

「こうしてお伺いしたのは、小日向さんが現場に通りがかったから
だけが理由ではありません」

春日井は穏やかに切り出した。

「まだ報道では伏せられています、殺された黒沢輝美という女性
は我々の同僚です」

「伏せられているのに、名前とか身分を僕に言ってもいいんですか」
「わたしたちの前に公安部の刑事がここを訪れたのは知っています。
今更、下手な芝居はやめた方がいいですよ」

春日井は微笑を浮かべながらこちらの顔色を窺うかがっている。前言撤
回。やはり刑事部の人間も油断がならない。

「公安部がただの通りすがりの人間を事情聴取するはずもない。あなたは黒沢とどんな関係があったんですか」

小日向は奇異な感に打たれる。神経を針のようにして質問を聞いていても、春日井に小日向をおとし陥れるような素振りは見えない。

まさか公安部は（エキスプローラー）について刑事部に情報を流していないのか。それなら自分からは、絶対にその名を口にしてはならない。

「あの、僕が公安部の刑事さんから事情聴取されたのはご存じなんですよ。だったら、聴取された内容もそちらで共有されているんじゃないんですか」

すると春日井も香田も途端に不機嫌そうな顔になった。

「ここ、区役所ですよね」

「ええ、ご覧の通り」

「それじゃあフロアの違う部署、たとえば税務課と小日向さんのいる生活支援課では、どれだけ情報共有がな為されていますか。その場で生活保護の申請に来た市民の納税状況がわかり、生活保護費受給の可否ができるくらいに」

「いや、それはちょっと」

「それと一緒にですよ。同じ建物の中にあっても、ツーカーという訳じゃありません」

「同じ警察で、しかも同じ事件を追っているんでしょ」

「同じ事件を追っていても、目的が違います」

「え。だって警察って犯罪を暴いて犯人を検挙するのが仕事なんですよね」

「我々刑事部は犯人を逮捕するのが目的ですが、公安部の目的は思想集団の情報収集が主目的です。従って犯罪捜査よりも諜報が優先します」

これは柳瀬が口走ったことにも合致する。彼らは輝美殺しの犯人が誰かよりも、ヘクスプローラーの情報を欲していたではないか。

「思想集団って……まるで僕がカルト教団の信者か極左の構成員だと疑っているんですか。平凡な区役所職員ですよ」

「テロを起こしかけた例のカルト教団は、警察や自衛隊の内部にも信者を忍び込ませていました。区役所職員が実はテロリストだったとしても、あの事件の後では何ら違和感がありません」

「やっぱり疑ってるんじゃないですか」

「身内褒めじゃありませんけど、公安部も完全に潔白な人間をつけ狙うような真似はしませんよ」

では、小日向は潔白な身の上ではないと言っているようなものだ。「我々は必ずしも死体発見現場イコール犯行現場とは考えていません。犯行後に死体が移動させられるのは珍しいことはありません」

から」

あんまりな言い方だったので、少し二人をからかってみたくなつた。

「知ってますよ。被害者の靴の底には周辺の工事で掘り返された土が付着していなかったんでしょ」

何の気なしに放ったひと言だったが、俄に二人の顔色が一変する。にわか

「どうしてそれを。小日向さん、それは秘密の暴露ばくろと言って」

「まさか。死体が運び出されたらしいのは遅かれ早かれ公表されることなんですよ。秘密も何も、土のことは公安の人から教えてもらったんですよ。鑑識の結果がそうだって」

「……他にはどんなことを聞いたんですか」

「現代の科学捜査は日進月歩で、被害者の髪の毛一本から、着衣の隅々まで調べれば彼女のいた場所が判明する。解剖すればどこで何を飲み食いしていたかも特定できる、と」

「まさか、その結果まで聞いたんですか」

「いえ、そこまでは」

春日井と香田は顔を見合わせてかすかに安堵あんどの吐息を洩らす。まだ公安部の二人が退席してから間まがない。まだ鑑識から追加の報告が上がっていないか、上がっていたとしても公安部までには洩れていないのだろう。

「それじゃあ小日向さん。あなたが公安部案件の集団に関係ないと
して、黒沢輝美とはどういう関係なんですか」

問い詰められた時、小日向の中で計算が働いた。春日井と香田の
やり取りを見ている限り、刑事部と公安部は情報共有もないまま別
個に動いているようだ。従って公安部に知られている事実であつて
も、この二人に教えなければならぬ謂^{いわ}れはない。わざわざ自分で
立場を悪くする謂^{いわ}れもない。

「あの、僕はその黒沢輝美という人を本当に知らないんです。それ
は公安部の刑事さんにもお伝えしました」

「しかしあなたは今朝、死体発見現場で職務質問を受けている。あ
なたの通勤経路からは大きく外れているのに、どうして現場に立ち
寄る必要があつたんですか」

これは先刻と同じ弁明をするしかないだろう。小日向はまたもや
自分が廃駅鉄という特殊な趣味の持主であることを告白する。

「廃駅が趣味、ですか」

春日井は呆^{あっけ}気にとられ、香田に至っては馬鹿にされるとでも
思ったのか明らかに気分を害している。理解され難い趣味を理解し
てもらふ試みは、これが初めてではない。根気よく廃駅の魅力や、
今まで自分がどこの廃駅をどれだけ苦労して訪れたのかを熱弁した。
何度も同じ内容を喋^りっていけば言葉も流暢^{りゆうちやう}になるし、話の勤所^{かんどころ}も

分かってくる。現に二人の刑事はそれなりに納得した様子だった。

「小日向さんの趣味については概ね理解しました。それだけ廃駅の知識を披露されたら信用しない訳にはいきませんかね」

春日井はうんざりだという表情で言う。これで事情聴取を切り上げてくれるのなら、自分の趣味も満更捨てたものではない。

「では、あくまでも黒沢輝美とは面識も何もないと言うんですね」

「はい」

よくもこれだけ白々しい嘘が吐けるものだ和我ながら感心する。

おそらく先の公安部の事情聴取で変に度胸がついたせいだろう。

春日井は束の間こちらを睨んでいたが、やがて鼻を鳴らすと人差し指を立てた。

「これ以上続けても成果がないようなので失礼します」

二人が立ち上がった時、ほっと溜息を吐きそうになったが慌てて堪えた。

堪えて正解だった。退室する際、春日井は一度だけこちらに振り返ったのだ。

「被害者と一面識もないと断言された以上、今後の捜査でそうではない事実が判明した時、あなたへの心証は相当に悪くなる。それは理解していますよね」

「……重々、理解しています」

「それなら結構です」

くるりと向けられた背中に威圧感があった。やはり春日井たちも刑事には違いないのだと再認識させられた。

一人になった途端、どっと肩が重くなった。同時に膝から下の震えが一向に止まらなくなる。今まで緊張で麻痺していた感覚がよみがえ甦ったのかもしれないが、とても立ってはいられず、小日向はソファに座ったまま天井を仰いでいた。

ドアをノックする音が聞こえたのは、その直後だった。

また春日井たちが戻ってきたのだろうか。急いで背筋を伸ばして返事をする、入ってきたのは瀬尾だった。

「おーい、生きてるかー……って、そんな風じゃなさそうだな」

瀬尾は勧められもしないのに、小日向の真横に腰を下ろした。

「警察の用事は済んだのか」

「まあ、ひと通りは」

「その口ぶりだと、まだ続きがありそうな雰囲気だな」

「そんなことも言ってましたね、先方は。それよりどうしたんですか。僕を呼びにでも来たんですか」

「逆だよ、逆。まだしばらくはフロアに戻ってこない方がいい。二度に亘るお巡りさんの訪問で、ちよわたっと微妙な空気が漂ってる」

仕方がないだろうと思った。刑事二人の訪問だけでも大した異常

事態なのに、それが続けざまにふた組ともなれば未曾有の出来事になる。

「他の職員が浮足立っている。今、お前が出ていったら微妙な空気に火が点きかねん。下手したら集中砲火を浴びるぞ」

「何で僕がみんなから攻撃されなきゃいけないんですか」

「近寄りたくないから。でも自分の動ける範囲が限られている場合は、原因になったヤツを追い出そうとするだろ」

「そんな子供みたいな理屈で」

「あのな。政治思想だろうが民族差別だろうが他宗教だろうが、排斥行動の原理なんてそんなものなんだぜ。理屈とか理論の前に感情があつて、そいつが人を攻撃的にするんだ」

「でも、みんな礼儀正しい公務員ですよ」

「礼儀と悪意には何の関係もない。人間つてのはな、燕尾服を着ていても平気で残酷なことができる動物だぞ。ついでに言うと、公務員つてのは何よりも異色と異例と失敗を嫌う。だから警察がよつてたかつて疑うような人間を怖がる」

黙って聞いていると、瀬尾の言説が何故か耳に心地よくなる。元々、歯に衣着せぬ物言いが身上の男だが、職場や上司の悪口を言わせると殊更歯切れがいい。

「瀬尾さんだって立派な公務員じゃないですか」

「だから分かるんだよ。それに身内だったら庇^{かば}う、自分の職場の論理なら正当化するってのがそもそも性に合^しわないんだ。お前は違^{ちが}うだろ。身内どころか、少しでも縁ができるとそいつを護^{まも}ろうとする」
突っ込まれても反論できない。小日向が輝美の死体を運んだのも、元はと言えば司直の手が（エクスプローラー）に伸びないように行^いったことだ。場の雰囲気^{ふんいき}に流^{なが}されたとは言え、できてしまった縁を断^きち切れなかった小日向に非がある。

「神田多^{かんだ}町^{たちょう}で女の死体が発見されたのは、俺もネットニュースで見^みた。警察のヤツらが来たのはその事件絡^かみなんだってな」

「みたいですよ」

「みたいですよって、そういうのを他人事^{たにじ}みたい^いに言うな」

瀬尾は背中から手を回して、小日向を逃^にがすまいとするかのように肩^{かた}を掴^{つか}む。

「正直に言え。お前、殺された女と関^かわりがあるのか」

「どうして刑事でもない瀬尾さんに、そんなことを話さなきゃいけないんですか。関^かわりがあるうがな^なかろうが僕のプライバシーじゃないですか」

プライバシーさえ盾^{かざ}に取れば、さしもの瀬尾も諦^{あきら}めると思^{おも}った。
いささか卑怯^{ひせつ}な手段^{しゅん}だが、最も効果^{こうか}的に思^{おも}えた。

だが瀬尾は予想^{よそ}外の言葉^{ことば}を口^{くち}にした。

「ちょっとした縁も断ち切ろうとしない男との縁を断ち切ろうとは思わんからさ」

無愛想で、婉曲えんきよくてき的な物言い。

それでも胸の深いところまで届いた。

「……瀬尾さんてJポップの人だと思ってましたけど、実は浪花節なにわぶしだったんですね」

「洒落しゃれで済ませて逃げようって算段か」

「逃げるも何も本当に関係ないんですったら」

「ほう。何も関係のない通りすがりの人間に、警察がわざわざ二班も事情聴取にやって来た、とそう言い張るんだな」

「ええ。そう言い張ります」

良心がちくりと痛んだが、他の選択肢はなかった。事情を説明すれば、瀬尾も騒ぎに巻き込んでしまう可能性がある。

瀬尾は少しの間、監察するように小日向を見ていた。

「分かった。信じるよ」

肩にかかっていた力が、ふっと抜ける。

「でも、まだ戻るな。申請者の途切れる五時くらいまでは、ここでじっとしている。それくらいは休憩なら課長も文句は言わんだろ」

「山形課長、時間厳守がモットーじゃないですか」

「時間より大切なものがあれば優先する。それくらいは心得てるぞ。」

伊達に管理職やってる人じゃないよ」

瀬尾はさばさばと切り上げ、応接室のドアを開ける。ただし春日井と同様に最後に言い残すのを忘れなかった。

「信じるけどよ。前言撤回つてもアリだからな」

「え」

「不測の事態が生じたんなら、すぐ手を挙げるよ。手遅れは論外だが、多少のタイムラグだったら間に合う」

「何だか遭難救助の心得みたいですね」

「似たようなもんだろ」

そして小日向一人が残された。瀬尾が出ていくと、部屋の温度が急に下がったような気がした。

瀬尾が手を差し伸べてくれようとしたことは意外だったが、同時に胸に明かりを灯してくれた。たとえば社交辞令であったとしても嬉しい。

だからこそ、差し伸べてくれた手を振り払い、親身になってくれた者に去られた瞬間、不意に寒さを感じたのだ。

誰にも迷惑を掛けたくない——殊勝に心掛けたつもりだったが、いざ孤立してみれば途轍もなく心細い。その証拠に、またしても膝が笑い出した。つくづく自分ほど小市民と呼ばれるに相応しい者はいないと思う。

だが、世の中には小市民でいることさえ許されない者たちがいる。陽射しに灼かれ、地下に追い立てられた人々がいる。徒手空拳の身の上だが、彼らを見捨てる気にはどうしてもなれなかった。

とにかく瀬尾の忠告通り、申請時間の締め切りになる午後五時まではこの部屋に立て籠もつていよう——そう肚を決めた時、胸のスマートフォンがメールの着信を告げた。

発信者は香澄だった。

『久ジイがなかなかウンと言ってくれない』

あれほど逃げるようにと伝言を依頼していたのに、どうやら説得に失敗したらしい。メールで返信しても埒が明かないので、直接呼び出した。

『えっ、小日向さん。今、工作中じゃなかったの』

小日向は内心で香澄を叱りつける。自分たちの身に危険が迫っている時に、他人の就業状態を気にしている場合か。

「ひよっとしたら、まだ萬世橋駅まんせいばしにいるのか」

『ひよっとしたら何も他のどこに行けばいいって言うのよ』

香澄の声は今にも泣き出しそうに聞こえる。彼女の性格では簡単に泣き出すとも思えないが、久ジイ以下地下住民の説得に失敗したのがよほど口惜しいのか、それとも怯えを必死に押し隠しているのか。

『小日向さんが警告しているって言っても、逃げ場所はここしかないって言うし、そんなに早く警察がやってくるとも思えないしとか』

「警視庁の公安部がどんな部署だか知っているのか」

『小日向さんはどれだけ知っているのよ』

「あれは、君ら（エキスプローラー）が極左集団だと最初から疑っている。誰が輝美さんを殺したかなんて興味は二の次三の次だ」

『だから、何でそういう話になるのよっ。あたしたち被害者の立場なのに、どうして警察からマークされなきゃいけないのよっ』

「キレるな、香澄ちゃん」

対面していても手に余るのに、電話越しではどうすることもできない。しかし香澄に動いてもらわなければ、他の住人たちを避難させることも叶かなわない。

「今、そつちに間宮先生はいるか」

『自分の診療所に急患が担かぎ込まれたって。だから今日はまだ来ないよ』

こんな時に限って急患かよ。勘弁してくれ。

「じゃあ永沢さんはいるか」

『さっき見掛けた』

「香澄ちゃん一人で説得できないなら、永沢さんにも口添えしてもらった方がいい」

『それ、駄目だから』

「何が駄目なんだよ」

『永沢さん自身があまり危機感ないってというか、イマイチ焦ってないってというか』

「今から永沢さんと一緒に出られるか」

こうなったら永沢も強引に動かすしかない。

「警察の監視がついているかもしれないから、僕が地下に行かない方がいい。永沢を連れて、こっちまで出てきてくれ。くれぐれも慎重にだ」

警察沙汰になった職員に残業を命じるような度胸はないらしく、小日向が定時に退社しても山形は何も言わなかった。職場全体にも小日向を忌避きひしている雰囲気かえが漂ひっており、早く帰ってくれという無言の圧力が却かえって背中を押してくれた格好だった。

庁舎を出た瞬間、小日向は周囲に注意を払う。香澄にも言ったが、公安部や刑事部の捜査員あつらたがこのまま自分を放置してくれるとは考え難い。少なくない確率で小日向を尾行しているはずだった。

既に帰宅ラッシュが始まっており、往來はサラリーマンやOLで人の波あつらができています。お誂あつらえ向あつらきだ。これだけ通行人あつらでこった返していけば、その分尾行も困難になる。

小日向は地下鉄で早速中野なかのに移動する。満員電車の中でちらちらと辺りを窺う。相手は尾行に長けた警察官たちだ。易々やすやすと小日向に見つかるようなへまはしないだろうが、それでも尾行の対象が警戒している素振りを見たら、何らかの牽制けんせいになるかもしれない。

JR中野駅の北口で下車する。目の前には中野ブロードウェイのビルが聳そびえ立っているが、小日向の目的地はここではない。ビルの前を横切り、しばらく歩いてから脇道に入る。ちらと背後を振り返るが、自分を追っているような人影は認められない。

それでも油断は禁物だ。小刻みに角を曲がり、仮に尾行があったとしても攪乱かくらんできるように歩き続ける。

普通はの速度で歩いてから、急に走り出す。傍目はためには奇妙に映るだろうが、これも尾行を撒まくために思いついた対策だ。何度も繰り返していると、額ひたいから汗が滴したたり落ちてきた。

もう、この辺でいいだろう。

小日向は尚も周囲に気を配りながら、馴染みの看板に近づいていく。

喫茶店（中野レールウェイ）。

看板は駅名標を似せたもので、店先のディスプレイには所狭しとNゲージの鉄道模型が陳列ちんれつされている。

ドアを開けるとすっきり顔馴染みとなったマスターがすぐに笑顔

を向けてきた。

「いらつしやい。お連れがお待ちですよ」

「ども。マスター、変な客とか来なかつた？」

「店の中を見回したら一目瞭然いちもくりようぜんでしょう」

カウンター以外はテーブル七脚のこぢんまりとした店内だが、実際の敷地面積は五十坪ほどあるはずだ。それが狭小に見えるのは、店先のディスプレイに陳列しきれない鉄道グッズがフロア内を占領しているからだ。

JR・私鉄・メトロ各線の駅名標は言うに及ばず、車両の写真や鉄道各社の制服がずらりと壁を飾っている。窓の近くには遮断機の二分の一スケールのミニチュア、テーブル二脚分を丸々使用した鉄道ジオラマ、本棚に収まっているのは全て時刻表じこくという凝りようだ。〈中野レールウェイ〉は、その名の通り鉄道マニア専用の喫茶店だった。

こういう店なので、テーブルに着いている客は全員が顔見知りだ。撮り鉄・乗り鉄・車両鉄・模型鉄の違いはあれど趣味に一生を捧げると誓った同志たちだった。全員が顔見知りだから一人でも異物が紛れ込んでいたらすぐに分かる。小日向がここを会合の場所に選んだ理由がそれだった。

香澄と永沢は店の奥、天井から各種吊り革の下がったテーブルで

居心地悪そうにコーヒーを飲んでいた。親愛なる友人でも、ここでは異物に違いなく、二人とも周囲から完全に浮いている。

「お待たせしました。この店、すぐに見つかりましたか。結構入り組んだ場所にあるんで心配したんですが」

「いや、店の位置とかはスマホの検索で問題なかったんだけどよ」

永沢は頭上に垂れている吊り革を眺めながら言う。

「えらくマニアックな店だな。色んな喫茶店に行ったけど、こういうのは初めてだ。って言うかこれ、コーヒー飲みに来るんじゃないかって、模型とかのグッズ眺める片手間にコーヒーすす啜る店だよ」

隣に座っている香澄は胡散臭うさんくさそうな態度を隠そうともしない。

「小日向さん、ここの常連なんですよ」

「週一で来る」

「何が楽しいの」

「店内にある全てが」

「安らぐ？」

「この上なく」

「今も永沢さんと話してたんだけどさ。廃駅鉄って趣味、いくら小日向さんから説明されてもイメージしにくかったんだけど、この店に来てやっとイメージできた」

「それはどうも」

「小日向さんがヤンバルクイナよりは珍獣じゃないのは確認できた。でも引くのは相変わらず」

なかなか辛辣しんらつな評価だが、香澄のような女子にとって鉄道マニア全般が特殊なのだろうと想像する。

「最近はその鉄オタも珍しくないんだけどね」

「前より増えたっただけで、全体からみたらどれだけのパイなのよ」「だよなあ。中野って結構地代も高いんだろ。よく喫茶店経営が継続できるよなあ」

「聞けば聞くほど凹へこむんだけど、そういう趣味が成立しているから、この喫茶店みたいな隠れ家ができる。この店には鉄道マニアしか来ない。警察関係者がいたら一発で分かる」

「なるほどな。一般人は侵入不可ってこった」

「その言い方もちよつと傷つくんですけど……まあ、鉄オタの話はもういいです。本題に入りましょう」

小日向は、公安部に続いて刑事部の刑事からも事情聴取を受けた旨を伝える。同じ警察でも公安部と刑事部では最終目的が相違すること、特に公安部は（エキスプローラー）に特段の興味と疑念を抱いていることを強調する。

電話口での反応もそうだったが、香澄は小日向と同等の危機意識を持っていろいろだ。ところが永沢ときたら、輝美の死体運搬に関

与しておきながらさほど切羽詰まったようには見えない。

「いや、公安部にマークされるのがヤバいってのは俺でも分かるよ。たださ、俺たちに極左集団の疑いが掛けられているってのがそもそも絵空事えそじごとにしか思えないんだよな」

「でも永沢さん。現に公安部の捜査員だった輝美さんが住人の中に紛れ込んでいたんですよ」

「それにしたって何かの間違いじゃないのか。輝美がいる時に、俺たちの誰かがテロの計画をしたなんて話もない。いや実際、俺たち八ヶ部町やっの住人は放射能事故の被害者なんだからさ」

永沢の弁明じみた言葉に、香澄も浅く頷いている。

ああ、これだと思った。

元八ヶ部町の住人たちが極左集団の疑いを掛けられてもどこかのほほんとしているのは、この被害者意識があるせいなのだ。自分たちは国の政策と町の振興策に従っただけで、しかも放射能漏れ事故で健康な身体と平穏な生活を奪われた。どこをどう取っても自分たちは被害者であり、だからこそ手の平を返したように加害者扱いされることに感覚がつかないのだろうか。

「ご存じの通り、僕は生活保護申請の窓口業務をしています」

「ああ。だから（エクスプローラー）の何人かの役に立ったよな」

「公務員の仕事をしていると分かります。被害者が護られて、加害

者が糾弾きゆうたんされる。そういう当たり前が通用しない時がある。司法も行政も完璧に機能していないんです」

話している最中、紅林典江の件を思い出す。小日向が反逆しなければ生活保護の申請を却下きやくかされていた案件だったが、彼女も政策の被害者になりかけていた。典江だけではない。今まで政策の名の下にどれだけの社会的弱者が虐げしいたられたことか。

「ひどい話だけど、そんなことが大手を振ってまかり通っています。省内であからさまな不正をした役人が、優雅な天下りあまくだで余生を保証されています。勸善懲悪かんぜんちやうあくなんて、それこそ絵空事なんです」

「小日向さん、声大きい」

香澄かみの囁ささやきで我に返った。

慌てて周囲を見回すが、他の常連客は各々の世界に没入しているように見える。ただしマスターがちらとこちらを一瞥いちべつしたので、声が大きかったのは確かだ。

永沢は居心地悪そうに、尻の辺りをもぞもぞとさせている。

「あー、お前の言うのも分かる。地下暮らしが非法だから、警察に踏み込まれたら全員捕まるってのも分かる。けどよ、久ジイも同じことを言ってたんだけど、仮に公安部から逃げるとしても、いったいどこに逃げればいいんだよ。(エクスプローラー)は誰もがかなり小なり乾皮症かんびしやうを患わづらっている。地下を出るのなら、俺たちは二十

四時間皮膚がんの恐怖に怯えなきゃならない」

「逃げ場所ならあります」

永沢と香澄の表情に変化が生じた。

「本当かよ。そりゃあどこだ」

「地下鉄の廃駅は萬世橋駅だけじゃないってことです。銀座線だけでも他に旧新橋駅、それから表参道駅には使われなくなったホームが存在します」

ここからが廃駅鉄の本領の見せどころだ。小日向は東京が帝都であった時代に建設された駅の歴史についてひとくさり講義する。

様々な理由で使用されなくなったものの、地下に広大な空間を秘めながら口を閉ざした廃駅たち。もちろん堂々と入れる場所ではないが、百人程度の人間が隠れ住むには十分な広さを持っている。

「まさか、地下から地下への移動かよ。俺たちは百人いるんだぞ」

「一遍に移動するんじゃないんです。十人単位で動けばリスクも軽減されるし、地下から地下の移動なら太陽光線に怯えなくて済みます」

「年寄りや病人も少くないんだぞ」

「どっかの施設に強制収容されると、どっちが楽か、ですよね」

「……割とエグい選択肢、用意するんだな」

「今更？ この人さ、見掛けよりずっとエグいし犯罪傾向強いよ。」

あたし、ひと目で分かった」

「あの、香澄ちゃん。それはちよつと言い過ぎ」

「非合法に非合法を重ねるって話でしょ。そのどこが犯罪じやないって言うのよ。まあ、あたしたちのために考えてくれてるんだから大目には見るけどさ」

「犯罪的とかはこの際どうでもいいけどよ。お前自身は成功率をどれくらいで考えてるんだ」

「正直、考えてません」

「何だと」

「逆に訊きますけど、成功率が低かったら、そのままそこで警察が踏み込んで来るのを待ち続けるつもりなんですか。何も手を打たず、自分たちが不利な状況に追い込まれるのを、指を咥くわえて見ているだけですか」

「……口説き方もエグいな」

「豹変ひょうへんしやすいタイプだよー」

口調は軽いが、二人とも深刻な顔をしている。少なくとも小日向の提案が検討に値あたするものであると考えてくれたようだ。

「お前さ、今した説得、久ジイ相手でもできるか」

永沢の声が一段落ちる。

「俺や香澄ちゃんを説得できても、久ジイを動かさせなきゃ事態は変

わらん。ところでどういう訳か、久ジイはお前を信用しているみたいだ。俺なんか口伝くちづてで喋るより、お前が直接久ジイを説得した方が手っ取り早い。どうだ」

「……やってみます」

よし、と言って永沢は席を立つ。

「じゃあ善は急げだ。これから久ジイに会いに行くぞ」

永沢たちについていけば、ますます深みに嵌はまる——そう考えるとすぐには身体が動かなかったが、矢庭やにわに顔を寄せてきた香澄の耳打ちおじけが怖気ふっしょくを払拭はらした。

「ここまできたら一蓮托生いちれんたくしょうだから」

「そんな言葉、どこで習った」

「少なくとも学校じゃないよね」

二人に先導されるかたちでレジに向かう。マスターは何事もなかったかのように、平然と釣りを渡してきた。

「あの、マスター。僕たちがここに寄ったことは秘密にしておいてくれますか」

「秘密ひみつにしておくのに吝やかかではないんだけどね。小日向さん、声大こゝろき過ぎ」

「え」

「カウンターまで丸聞こえだったから」

「全部？」

「小日向さんの台詞は全部せりふ」

「話の内容も」

「概ねは」

横にいた永沢と香澄は途端に警戒の色を強めた。

「あいつ、行きつけのお店に迷惑はかけたくないんですけど」

「人助けなんですよ」

「……はい」

「だったら邪魔する理由はないよね」

レシートを差し出す際、マスターは紙片の最後尾を指差した。

「見逃していると思うけど、ここにウチの電話番号が入っているか

ら

何かあれば連絡しろという意味か。

「同好の士が身体を張って人助けしようとしているんだ。共謀はで

きなくても協力はできるよ」

涙が出るほど有難い言葉だったが、途中で嫌なことに気づいた。

「マスターに丸聞こえだったんですよ」

「うん」

「それなら店内の皆さんにも丸聞こえだったということですよね」

「だよね」

「それなら皆さんの口も封じておかないと」

慌てて店内を見回して、小日向は声を失った。

模型に時刻表にディスプレイ。客は各々の楽しみに没頭しながら、全員が親指を立てていた。

2

銀座線神田駅周辺は、未だ帰宅ラッシュが続いていた。ホームには乗降客が溢れ、証明写真ボックスに出入りしても目立つ状況ではない。一人ずつボックスに入り、周囲に監視の目がないことを確認して地下空間に辿り着いた。

今日は運に恵まれているだけだ、と自戒する。公安部と刑事部から本気で尾行されたら身動きできなくなるのは必至だ。

先に香澄が連絡してくれていたので、久ジイは小日向の到着を待っていた。

「聞いた話では災難だったそうだね」

久ジイはまるで他人事のように言った。

「ええ、ええ。ひどい災難でした。でも、皆さんにはもっとひどい災難が待ち構えているんですよ。一刻も早く逃げてください」

「小日向くんの警告は香澄から聞いたが、どうにも現実味がのうて

な」

説得するにしても直接言わなければ駄目だ。永沢の言葉を思い出し、二度手間だが二人に話したのと同じ言葉で説得する。久ジイが己おのれを信用してくれているらしいのが、唯一のアドバンテージだった。

以前に聞いたことがあるが、久ジイは八ヶ部町の町長でもなければ名士でもなかった。ただ被害を受けた住人たちの長老だったというだけの理由で、何となく責任者に祭り上げられたのが実状らしい。考えるだに面倒臭い話なのだが、それでも文句も言わずに引き受けるところが久ジイの人徳だろう。

地下の住人を廃駅から廃駅に移動させるという計画を聞くと、それまで無表情だった久ジイが小首かしを傾げた。

「東京の地下にもう使われない空地があるのは、わしも聞いておるよ。分散すれば移動できるといふ理屈も、まあいいとしよう。しかしな、小日向くんよ。仮に萬世橋駅から移動したとして、警察はすんなり諦めるものだろうか」

「と言いますと」

「通常の犯罪捜査だけならまだしも、公安部が絡んでいるとなれば捜査網も倍ということになる。前から把握はあくしていた場所がもぬけの殻になっていたらとって、警察は追跡をやめるだろうかね」

「多分、やめなと思います。輝美さんから皆さんの顔なりプロフ

イールなり情報が洩れているはずだから、警察は一人一人を探し続けるでしょう」

「わしらが陽の光を嫌っているのも承知しているだろう」

「地下暮らしとワンセットの情報ですから」

「失礼な言い方になるが、小日向くんが考えることなら、警察も思いつくんじゃないのか」

「当然、思いつくと思います。萬世橋駅に踏み込んで、人っ子一人いないとなったら同様の地下空間を怪しむと思います」

「それだとわしらは、警察の追手から逃れるために何度も移動を繰り返す羽目になるな」

予想された言葉だった。小日向は無責任な立場で移動を提案したが、要するに夜逃げのようなものだ。夜逃げは住人の生活を根こそぎ奪う。起床に就寝、食事に入浴、ありとあらゆる生活のリズムを奪い、住人に不便と忍耐を強要する。(エクスプローラー)の責任を負う久ジイとしては、軽々に判断を下せないのも道理だった。

「リスク分散で、皆さんが別々の廃駅に移動する選択肢もあります」

「リスク分散か。賢^{さか}しらに聞こえる文言だがな、そのリスクというのは、そのまま住人一人一人を指している。言い換えるなら十人の住人を隠すために、別の十人を警察に差し出すのと同じ理屈だ」

「でも、全員が捕まるよりはマシじゃないですか」

「多数の幸福のためなら、少数の不幸は致し方ない……それはな、小日向くん。むしろ八ヶ部町の人間が痛いほど味わった理屈だ」
胸が締めつけられた。

目先の可能性に気を取られ、そんな単純なことにも気づかなかつた。

「少数を切り捨てれば多数を生かせる。そんなもの、手前を安全圏に置いた者の身勝手な理屈だ。手前がその少数派になることなぞ想像もせん人間の空論だと、わしは思うが」

反論の余地はなかった。いちいちもつともで、まるで己の不人情さを指弾しだんされているような気分だった。

「小日向くんがわしらの身を案じてくれるのは嬉しいよ。わしの人を見る目に狂いはなかったと誇らしくもある。だが、分散方式にはどうしても肯うべない難い。それにリスク分散と言っても、それぞれを統率するリーダーを用意できるかも心許こころもとない」

「移動するなら全員でが最低条件という訳ですか」

「最低条件とまでは言わんよ。それを叩き台にしてほしいと言って
いる」

久ジイの声が俄に懇願こんがん口調になる。

「小日向くんの厚意こういには感謝する。死体の運搬など一番嫌われる仕事まで押しつけて申し訳ないとも思っておる。申し訳ないついでに、

もう少し付き合ってくれんか」

目の前の頭が下げられる。制止しようとしたが遅かった。

「あんたが廃駅に詳しいのは、よおつく分かった。それならば、その知識と知恵を生かして更に最善の策を考えてくれんか」

助けを求めようと香澄と永沢に視線を移すが、二人とも切なげにこちらを見返すだけだ。

自分の優柔不断をこれほど呪ったことはない。

ただ、同時に妙な爽快感もあった。自己分析すれば自殺衝動に近いものかもしれないが、どのみち久ジイに直談判じかだんばんしよう^と決心した時点で香澄の言葉を受け容れるしかなかったのだ。

「ここまできたら一蓮托生、か」

「そう思ってくれると、尚有難いな」

「分かりました。分散以外で計画を詰めてみます」

「あまり時間に余裕はないのだろうか」

「昼の仕事も余裕がありませんから。慣れっこですよ」

香澄と永沢は、ほっと安堵の顔を見せるが、こちらは安堵どころではない。今から効率的な回避計画を練らなければならないのだ。

精々二人にも骨を折ってもらうとしよう。

早速取り掛かろうとした時、予てからの疑問を思い出した。ちよかねうど目の前には久ジイがいる。訊くには絶好の機会だった。

「久ジイ。質問していいですか」

「この際だ。わしが知っていることなら何でも答えるよ」

「輝美さんの件です。彼女は公安部の刑事でした。元々、八ヶ部町の住人ではなかったんですよね」

「ああ、わしもここに来てから初めて顔を拝んだ」

「長老の久ジイさえ知らなかった輝美さんが、どうしてすぐ八ヶ部町の住人と認定されたんですか」

「ここに移転する際、自己紹介された。自分は田丸家……田丸というのは、わしと同じ集落に住んでいた住人だったが、事故後はさっぱり連絡が取れなくなっていた。輝美さんは田丸の奥さんの親戚で、当時逗留とまりゆしていた矢先事故に遭ったという触れ込みだった」

「自己申告だけで信用しちゃったんですね」

警戒心のなさが招いたことなら責める気にもなれない。だが、続く言葉が小日向を疑心暗鬼ぎしんあんきに陥らせた。

「いや、その前段階で紹介されたんだよ。彼女も事故の被害者だから一緒に連れていってくれと」

「誰がそんなことを頼んだんですか」

「わしらに萬世橋駅への移住を提案した者たちさ。具台的には高速増殖炉を管掌かんしょうしていた文科省の一部だな」

(くじく)